

A 小学校 ～問題解決的な活動を発展的に繰り返す～



一年を通して探究活動が複数サイクル行われるように計画することで、問題解決的な活動が発展的に繰り返されるようになっています。

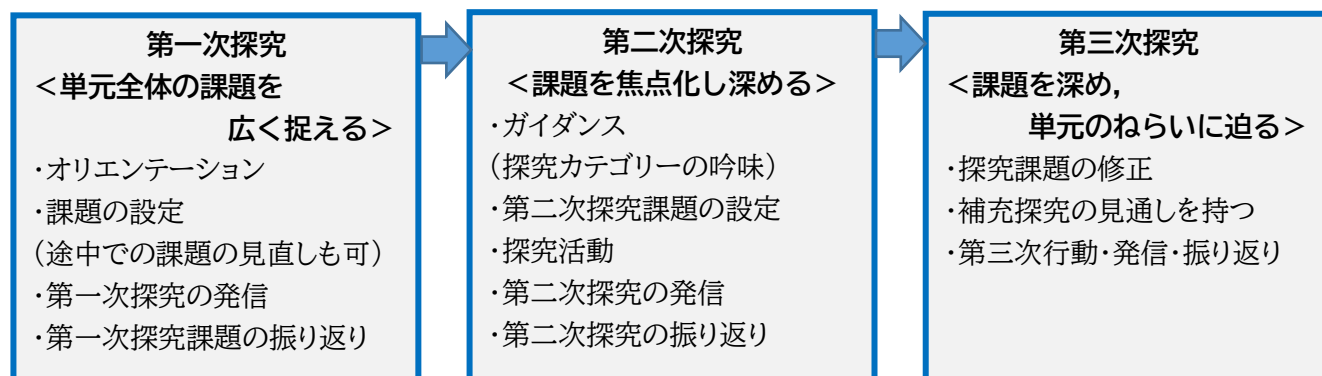


年間指導計画

年間指導計画は、児童が探究の過程を踏む中で育てたい資質・能力、設定したい体験活動、外部団体との関わり等、一年を通した児童の学習の方向性が具体的に記されています。

さらに、第一次探究として、探究の過程をたどりながら設定されたテーマについての理解を深める。第二次探究として、第一次探究で学んだ内容を基に新たな課題を設定し探究する。第三次探究として、第二次探究での発信の振り返りを基に、修正、補充、発展させたものをさらに探究していくというように、探究の過程を数回行う計画となっています。このことにより、問題解決的な活動が発展的に繰り返されていきます。

A 小学校の探究的な学習の大まかな流れ



課題の設定

A 小学校の探究的な学習では、子供が問いを立てるまでの過程を大切にし、時間を掛けています。具体的には、課題設定の場面で体験活動や講師の方の講話を取り入れ、そこで感じた思いを大切にさせながら探究活動をスタートさせるなど、児童がテーマを「自分のこと」と思えるような工夫がなされています。

振り返り

第一次探究と第二次探究との間をつなぐ際の振り返りの時間も大切にしています。それにより、児童が解決したい課題をより具体的に捉え、思いを強くさせるなどの工夫がなされています。一単位時間の最後にも振り返りを行い、その振り返りを基に児童の学習の進み具合や考え等を見取り、その後の計画や指導を修正、改善のために生かしています。

B 小学校 ～校内研究により教員の共通理解を図っている～



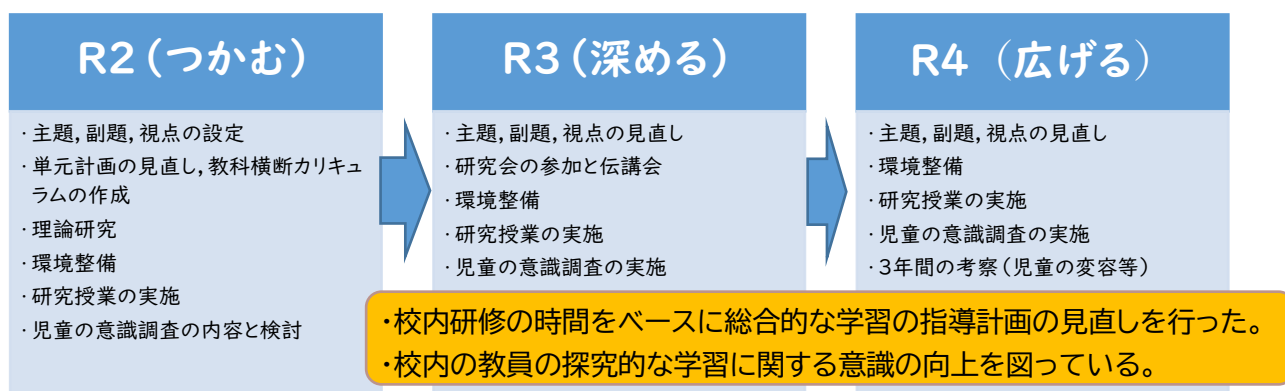
校内研究の時間を使いながら教員の探究的な学習についての認識を高め、協働で授業づくりを行った上で、研究授業を実施し、教員の共通理解を図っています。



校内研究に位置付け

3年に渡って校内研究で探究的な学習に取り組んできました。今年度は3/3年次に当たります。これまで、学級担任や研究主任を中心としながらカリキュラムを整備するとともに、校内研究の時間を使いながら教員の探究的な学習についての認識の共通理解を図っています。

B 小学校の研究計画（3カ年計画）



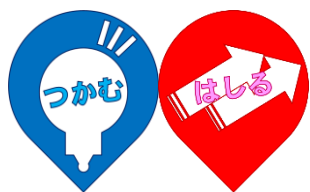
研究授業

研究授業は各学期に1回学年部で実施していて、協働による授業づくりを基に授業内容を検討しています。事前検討会は、授業者が立案した指導案素案を基に、全教員がそれぞれの授業構想を立案しています。そして、学習計画と探究のプロセスを対応させたり、疑問点を出し合ったりしながら擦り合わせを行います。最終的には授業研究部で内容を精査した後、学習指導案を全体へ提案する流れとなっています。こうした協働による授業づくりの課程を踏んだことにより、教員がだんだんと「子供たちがわくわく感を持てるように」という視点を持つようになり、楽しみながら授業づくりをする雰囲気が生まれています。

共通理解

研究1年目の令和2年度は、探究的な学習について教員の理解にばらつきがありました。職員間の共通理解を図ることを重点的に取り組みました。その結果、教員間の共通理解が図られ、探究的な学習の指導が充実していきました。更に、年間指導計画や単元計画、本時の指導など一つ一つの活動の中で、具体的な指導のイメージを持ちながら、目指す子供の姿の実現に向けて日々指導に当たっています。

C 中学校 ～教員が伴走者の役割を果たしている例～



教員が生徒の「伴走者」としての役割を果たせるよう、職員会議などで共通理解を図り、指導に当たっています。



チームで推進する探究学習

全学年の生徒が縦割りゼミ形式のグループに分かれ、年間を通して一つのテーマで個人探究に取り組んでいます。一人の教員が担当する生徒は11～12名で、教員は生徒の探究の進み具合を見取りながら、共に考えたり助言をしたりする「伴走者」の役割を果たしています。C中学校では、年度初めの職員会議で探究的な学習や校内の取組について共通理解をすることから始めています。そして毎月、探究学習担当者、研究部、各学年の総合担当者（学年主任＋1人）で打合せを持ち、職員会議で提案、検討し、チームで探究学習を計画、推進しています。

教育委員会は、2020年度から一般社団法人と連携して「探究学習支援事業」を立ち上げました。総合的な学習の時間には「探究学習コーディネーター」が毎回来校し、各教室を回りながら、活動を支援していました。生徒にとって、探究学習の相談に乗ってくれる心強い存在となっているようです。インタビューやアンケートを実施したい時は、地域の方々や企業との連絡調整も行い、忙しい先生方の強い味方にもなっていました。

授業風景

一人の生徒が、「災害時に水が手に入らなかったときを想定して、どうすれば飲み水が確保できるか」について実験を行っていました。理科教員が伴走しながら、生徒の実験を補助していました。ろ過装置も生徒が考案し、作ったもので、一度目はうまくいかず、今回は修正した装置での再挑戦でした。新しいろ過装置を通した水を煮沸し、COD検査をしたのですが、得られた結果は生徒が予想したものとは異なっていたようでした。この後も生徒の粘り強い探究は続いていきます。

生徒たちの協働の姿

教室や廊下などで生徒同士が互いの探究について相談し合う場面を何度も目にしました。後輩が先輩にアドバイスを求めたり、課題が似通っている何名かで集まってアンケートを作成したりしていました。別々の教室で活動していた生徒たちが、共通の目的のために集まり、自然と話合いの輪ができていました。



生徒が考案したろ過装置

D 中学校 ～学年進行で生徒の探究する力を育成している



学年進行で探究する力を育成できるように、指導計画を作成するとともに、地域学校協働本部を活用し、生徒の総合的な学習の時間の充実を図っています。



学年進行で探究する力を育成する取組

1年生は、総合的な学習の時間で「地域を知る」「職業について知る」を題材として学習に取り組んでいます。そこでは、生徒が探究的な学習のプロセスを踏んで課題の解決に迫れるよう、学習の過程を、課題の設定、情報の収集と整理・分析、まとめ・表現と3つの過程に分け、特に課題設定や見直しの時間を充実させています。その過程の中では、思考ツールを活用し課題を立てたり、グループで発表の機会を設けたりするなど、探究の方法が身に付くよう学習活動が計画されています。また、総合的な学習の時間の学習活動を通して、生徒同士の関わりを構築させることやコミュニケーションスキルを高めさせることも勘案して学習活動が実施されています。そして、2年生・3年生と学年が進行するにつれて学習の質を高めたり、深めたりする活動が実施される予定になっています。

D 中学校の「総合的な学習の時間」の目標

	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性
1 学年	解決の手段を知り、試すようにする。	示された形式で調査、発表することができるようになる。	示された課題について、取り組もうとする態度を養う。
2 学年	解決に向け、学んだ知識や技能を生かすようにする。	自分の課題に応じて調査方法や発表内容を構成できるようにする。	示された課題から、自ら深化させたいものを見だし、解決しようとしている。
3 学年	学んだ知識・技能を、社会と関連付けて、理解できるようにする。	未知の状況において、課題を見だし、調査・分析をとおして解決方法をまとめることができるようになる。	課題解決をとおし、社会参画の意識をもとうとしている。

地域学校協働本部との連携

地域学校協働本部と連携することで総合的な学習の時間の充実を図っています。地域学校協働本部はD中学校が所在するX市では各学校区に設置されています。地域学校協働本部の「地域コーディネーター」が中心となり、学校のニーズや地域住民の思いを拾い集め、地域の実情に合った活動を企画したり、それに伴う活動について支援をしたりしています。

1年生の「地域を知る」の授業では、設定した課題について探究する過程で、市議会議員や教育委員を招いて質疑応答する活動を行ったり、命について学ぶ学習でゲストティーチャー等を活用したりする場合に地域学校協働本部が講師等との連絡・調整をしています。

E 高校 ～地元NPO法人と学校が連携している～

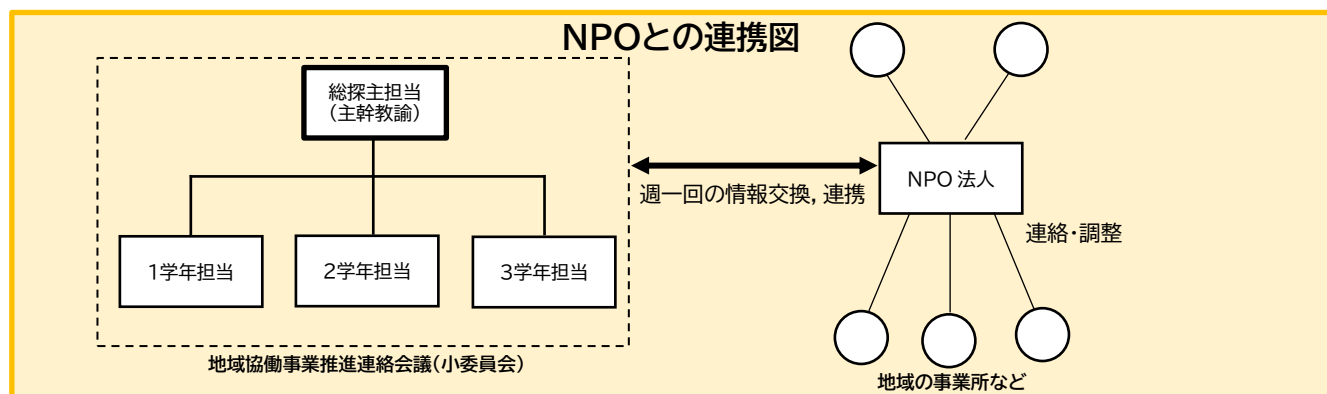


地域の資源を生かした総合的な探究の時間を進めているE高校では、地元NPO法人と連携するとともに、その実践のための校内体制を整えています。



地元NPO法人

地元NPOと学校が連携することにより、地域の事業所や行政機関、卒業生の学習活動への参画を円滑にしています。具体的な取組としては、総合的な探究の時間（以下「総探」）の担当者とNPOの担当者が週一回情報交換の機会を設定しています。情報交換の機会を設定することで、学校とNPO間での共通理解が深まり、生徒への指導に役立っています。情報交換にはそれぞれの学年の総探担当者も出席することから、学年間の情報共有も図られています。



年間指導計画

1年生は事業所訪問を実施し、地域の事業所や行政機関との交流の機会が設定されています。事業所訪問は、単なる職場体験ではなく、訪問した事業所から与えられた課題に対して生徒が解決策を考え、プレゼンを行い、課題に応えるという学習活動を行っています。

2年生は地域について学んだ1年生の学習の成果を基に、地域の魅力について新たに発見することを目標に学習活動を行っています。学習活動は興味・関心の似た生徒たちで作ったグループを基本として実施し、現地取材を行っています。現地取材は夏季休業中に学校所在の地域を中心に行っています。その後、9月に中間発表、

11月に最終報告を行います。

3年生は1, 2年生での学習成果を活かし、個人で自分の興味・関心のあることをテーマに課題研究に取り組んでいます。なお、年間指導計画は毎年少しずつ更新しています。

教師の姿

教師が自分の興味・関心のあることに対して探究活動を行い、その成果を生徒に対して発表する機会も設けられています。探究活動に教師が「自分のこと」として取り組む姿を見せることで、生徒の取り組む探究活動の良い見本になっています。

F 高校 ～校内組織の整備, 地元の事業所と直接連携～



校内に総合的な探究の時間運営委員会を設置し、校内の推進体制を整えるとともに、運営委員会の担当が地元の OB・OGなどと連携しています。



探究と進路選択

F 高校の総合的な探究の時間（以下「総探」）は、1 年生はグループ探究、2 年生は個人探究、3 年生の進路選択につながっていくという特徴がありました。

1 年生では、地域にある事業所から出された課題の解決に向け、探究します。事業所訪問に行くことができるよう、生徒が総探に取り組みやすい校内体制も整っています。生徒は、中間発表、最終発表という過程を踏み、探究を深めていきます。

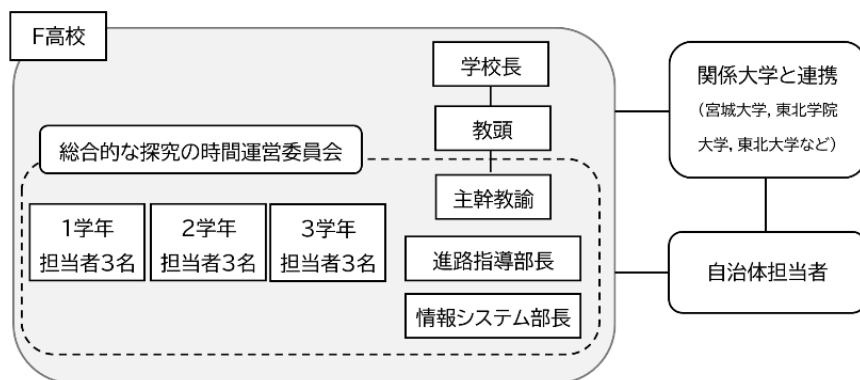
2 年生では、各自の興味・関心や将来やりたいことに基づき、個人で探究に取り組みます。課題の内容に応じて「文学・語学」「経済・経営」「医学・薬学」「国際」などの学問分野グループに分かれ、担当教員や地域の専門家に助言をもらいながら探究を進めていきます。2 年生の探究は行動範囲や情報収集の方法の幅が広がり、探究的な学びの質が高まってきます。2 年間の探究を通して見つめた自己の生き方・在り方が3 年生での進路選択へとつながっていきます。

総探委員会の活用

総探の本格実施に合わせ、校内組織の中に「総探委員会」が設置されています。この委員会に所属する教員が中心となって全体計画を立案し、その計画に基づいて各教員が実践しています。生徒の組織の中にも「総探進路委員会」が設置され、その委員の生徒が中間発表会で司会を務めるなど主体的に総探に取り組むための環境が整えられています。

卒業生の活用

F 高校では上記の学習活動を進めるに当たって、地元の卒業生とつながり、その協力のもと学習を進めています。この人材ネットワークの構築は、総探委員会の教員が積極的に行い、生徒のニーズに答えながら人選しています。卒業生は情報の収集に協力したり、中間発表会や最終発表会へ出席して発表に対し評価や助言をしたりするなど、連携体制が整っています。



F 高校 総合的な探究の時間 校内組織図